

はたらくネット

広報紙「はたらくネット」では、より多くの方々に障害のある方の就労について理解を深めていただけるように、積極的に障害者雇用に取り組んでいる事業者の取り組み事例を紹介しております。今号では、株式会社デジタルハーツの取り組みをご紹介します。

●株式会社デジタルハーツ [仙台市若林区]



左から 伊藤さん 瀧原さん 寺田さん

設立: 2001年4月
代表者: 代表取締役社長 筑紫 敏矢
事業内容: 総合デバッグ・テストサービス
セキュリティ事業
雇用状況: 身体障害14名、知的障害3名、
精神障害51名
(令和8年4月現在)

株式会社デジタルハーツは、ゲームの不具合を見つけるデバッグを中心とした、ゲームの品質保証を支援するサービスを提供しています。今回は、人事部サポート推進グループ管理者の瀧原さん、伊藤さん、寺田さんにお話を伺いました。

⚙️ 障害者雇用の出発点

瀧原さん 2014年にデジタルハーツの新しい拠点として、「仙台Lab.」を設立、そのときここ仙台で障害者雇用を推進するセクションを立ち上げました。まずは障害者雇用について知るため、はたらポート仙台や労働局、就労移行支援事業所※1などを訪問し、制度や採用の進め方について助言をいただくところから始めました。

設立直後は、会社そのものを知っていただくところからのスタートでした。そのため、まずは業務を整理し、「どのような仕事を担っていただくのか」を明確にすることを重視しながら障害者雇用の体制づくりを進め、2名を採用しました。

当初は紙の書類を扱う事務業務が中心でしたが、興味のある方にはデバッグ業務※2も経験していただいていた。その後、本社方針の変更に伴い、障害者雇用の中心は本業であるデバッグ業務へと移行しました。事務の業務量に限界もありましたが、ゲームデバッグを希望する方がたいへん多かったです。ゲームデバッグの難しさはありますが、しっかりマッチングをすることで可能でした。ゲームに興味を持ち働き甲斐を感じられることは、就労の継続に大きな力となっています。

⚙️ 応募前実習の実施

瀧原さん 実習では、業務の適性だけでなく、環境の変化への対応や周囲との関わり方なども確認しています。数日間の実習であれば、ご本人も無理をして頑張ることができます。しかし、その状態だけを見て「できる」と判断してしまうと、長期的な職場定着にはつながりにくいと考えています。そのため、実際の業務を経験していただきながら、ご本人の強みや課題、働き方との相性をお互い丁寧に確認しています。

※1 就労移行支援事業所: 一般企業への就労を希望する障害のある方が就労に必要な知識や技術の向上のために一定期間(標準利用期間は24か月以内)訓練を行う障害福祉サービス。

※2 デバッグ業務: アプリケーションやコンピュータプログラムのバグ(欠陥)を特定し、修正する作業。

寺田さん デバッグ業務は案件ごとに内容が異なるため、その都度一から覚える必要があります。自分から聞かなければ仕事が進みません。質問できなかった場合には理由を確認し、「こういう聞き方をしてみましょう」と提案しながら、一緒に練習しています。

伊藤さん どの業務でも、わからないことを自分から聞くという発信力が大切です。

瀧原さん 「なぜうまくいかなかったのか」について、本人が自ら振り返り、課題に気づけるかどうか也很重要です。「周囲が話しかけてくれないからできない」と考えるのではなく、自分なりに振り返ることができるかを見えています。こうした部分は、実際の実習現場でなければ分からないと感じています。

安定して働き続けるための仕組み

伊藤さん 毎朝、本人に体調管理システムへ入力してもらい、その内容を管理者間で共有しています。その日の体調や気になる様子を確認し、必要に応じて早めに声を掛けたり、面談を実施したりしています。

寺田さん 状態が悪化すると自分から発信することが難しくなるため、入社当初から「悪化する前に伝えること」の大切さをお話しています。長く勤務されている方の中には、「今日は少し調子が悪いです」と自分から伝えてくれる方も増えてきました。

瀧原さん 無理を続けたり、「何とか我慢しよう」と抱え込んだりする状態では、長期就労に繋がりにくく感じています。問題が起きてから対応するのではなく、事前に備えて準備しておくことが重要だと思っています。

また、社外の心理カウンセラーと会社が個別契約をしており、本人が自由に利用できる制度があります。就業時間内でも利用可能で、会社には話づらいことを相談できる場として活用されています。特にプライベートの悩みは、会社では話づらい一方で、就労に大きく影響することがあります。問題を直接解決するというよりも、考えを整理したり、自分で気づいたりするために大いに役立っていると感じています。

障害のある社員への理解を深めるために

寺田さん 実習の段階から、その方の特性に合わせた伝わりやすい関わり方を確認しています。入社後も就労移行支援事業所の支援者に、事業所での様子や効果的な伝え方を相談しながら対応しています。

瀧原さん 就労移行支援事業所からいただくプロフィールシートを通して、日々の訓練で取り組んできたことや支援内容を確認しています。ただ、本人の認識と支援者の認識にギャップがあることも多く、その差が大きいと後々のトラブルにつながることがあります。また、会社側が実習で感じた課題と、本人や支援者が捉えている課題が一致するとは限りません。それぞれの認識の違いを整理し、ギャップをできるだけ小さくしていくことも、管理者の重要な役割だと考えています。合理的配慮についても、本人・支援者・企業で認識を共有しながら検討しています。合理的配慮は単に負担を軽減するためのものではなく、本人が力を発揮し、仕事ができるようになるために必要なものだと考えています。そのため、どう配慮すれば働きやすくなるのかだけでなく、どのような環境や関わり方であれば、なお一層能力を発揮できるのかを一緒に考えるようにしています。

将来を見据えた準備

瀧原さん 長く働けば働くほど、ライフイベントなどにより、それまで必要のなかった支援を要することもあります。会社ができることには限りがありますので、定着支援が終了してからではなく、支援期間中から先を見据えて準備しておくことが大切だと考えています。

そのため、当社では定着支援が始まる際に、支援終了後も働き続けられるようにするための資料を用いて、本人・支援者・企業で今後の見通しや課題について確認しています。今日、明日が大丈夫だから終わりではなく、3年後、5年後も働き続けるために今取り組むべき課題は何かを一緒に整理し、必要な準備を進めていくことを大切にしています。



伊藤さん 就労移行支援事業所にいる間に、就職後に起こりうることを想定しておくことが大切です。できれば訓練中にクライシスプラン※3などを作成し、何かあった時にどのように対応するかを本人と支援者で確認していただけると、本人にも会社にとっても良い方向へ進めると思います。

寺田さん 働き始める前に、自分が働いていくビジョンを持つことも大切です。自分は何のために働きたいのか、自分にとって働くとは何かを振り返り、言葉にできるようになると良いと思います。

障害の有無に関わらず活躍できる職場を目指して

瀧原さん 障害のある方にも、企業の大切な戦力として活躍していただきたいと考えています。自らの力を発揮し、成果につながる経験は、働きがいにもつながります。そのためには、障害の有無に関わらず、一人ひとりの能力や特性を理解し、安心して力を発揮できる環境や体制を整えることが重要だと思います。適切な支援や配慮のもとで、それぞれが持つ力を十分に発揮できる会社でありたいと思います。

令和3年から働いている S・M さんに聞きました

—— 現在の就労につながった経緯について教えてください。

前職を退職した後は、しばらく引きこもりのような生活を送っていました。そんな中、インターネットで就労移行支援事業所の存在を知り、思い切って見学に行き、体験利用をしたことが現在の就労につながるきっかけとなりました。



—— 担当している業務について教えてください。

本社から依頼される業務として、従業員の日報や月報の内容確認、データ入力を行っています。また、書類整理などの事務作業も担当しています。

—— 仕事をする中で大変なこと、難しいと感じることはありますか。

細かなイレギュラー業務が発生することがあり、覚えなければならないことが増えると混乱してしまうことがあります。そのため、メモを取ったり、必要に応じて手順書を見返したりしながら対応しています。

また、業務面だけでなく、勤怠を安定させることも自分にとっての課題です。一日8時間働く体力を維持するため、小休憩をこまめに取りながら無理のないように働いています。

—— 仕事をする中で嬉しいこと、やりがいを感じることはありますか。

自分が担当した業務の件数や成果をしっかりと見ていただき、「安心して任せられる」といった言葉をかけてもらえると、とても嬉しく感じます。

仕事で必要とされていると実感できることが大きな励みになっており、「もっと頑張ろう」という気持ちにつながっています。

—— これからの目標について教えてください。

具体的な目標はまだ模索中ですが、まずは長く働き続けることが目標です。職場では無理のない範囲で業務の調整をしていただけるため、安心して相談することができています。これからも自分のペースを大切にしながら働き続けたいと思っています。

—— これから働きたいと考えている方にメッセージをお願いします。

働くきっかけを見つけることは簡単ではないかもしれませんが、自分を必要としてくれる企業はきっとあると思います。自分に合った働き方や仕事を見つけるためには、一人で悩まず周囲に相談することが大切です。支援機関や身近な人など、現在関わりのある方々をぜひ頼ってほしいと思います。

「ひとりで抱え込まないこと」、これは、過去の自分にもこれから働こうとしている方々にも伝えたいメッセージです。

※3 クライシスプラン：本人の体調の波に備え、対処法などをあらかじめ整理したもの。



10年以上働いている A・K さんに聞きました

A・K さんには広報紙第44号（令和4年8月発行）でもインタビューにご協力いただきました。今回は、その後の様子や昨年度の仙台市障害者雇用促進セミナーに発達障害のある当事者として登壇された際のお話を伺いました。

—— 前回のインタビューから、その後はいかがですか？

毎日の業務自体はそこまで変わっていませんが、会社の組織再編や AI 技術の急速な発展など、この数年は変化の大きな時期でした。所属部署も変わり、自分達としては急な話だったので戸惑いもありましたが、日頃お世話になっていた支援機関の方に相談し、会社の管理職の方々にも支えていただき、最後は本社も交えて皆で直接話し合う機会を持ちました。今振り返ってみると、そのおかげで以前よりも充実して仕事に取り組んでいると感じています。

思い通りにはいかないことがあっても、これまでの経験や人とのつながりは決して無駄にならず、自分を支えて成長させてくれるものなのだなと実感しました。

—— 今後の目標について教えてください。

これは自分でも少し意外なのですが、最近は「人の役に立ちたい」という気持ちが強くなりました。以前よりは少し余裕ができたのか、仕事でもプライベートでも、実は困っている人や、周囲に改善できそうな仕組みがあることまで目を向けられるようになりました。目の前に困っている人がいたら、少しでも力になればいいなと思って、普段から割と身軽に動けるようにしています。社会人になってからの方があまり深く考え過ぎずに、むしろフットワークが軽くなっていると思うのですが、案外これも仕事で身についたことなのかもしれません。

—— 昨年度の障害者雇用促進セミナーに登壇された感想を教えてください。

これまでもオンラインで話す機会 was ありましたが、昨年は100名以上が参加する会場で、本番当日は緊張して気づいたら終わっていたという感じてした。それでも講演後には多くの方から質問をいただいて、参加された皆さんの熱意を強く感じる事ができました。自分の経験が少しでも誰かの役に立てたのであればとても嬉しいです。

また、この1年で発達障害への社会的な関心や認識が進んでいることを実感する機会も多くありました。社会との関わりに少し苦手意識を持っている方にも、今は挑戦する機会や支えてくれる人達がいることを伝えていければと思っています。

—— これから働きたいと考えている方にメッセージをお願いします。

発達障害のある方の就労では、職場環境や周囲の理解によって働きやすさが大きく左右されることがあります。長く働き続けることに苦労される人も少なくありませんが、周囲の方々に支えられながら会社という組織の中で働くという経験は、発達障害のある人にとって自分の特性の理解を深めて、社会に活かすための方法を学べるチャンスでもあるのだなと日々感じています。

まずは最初の一步だけ、できればあまり考え過ぎず気軽に周囲に相談をしてもらえたらと思います。



就労中の A・K さん



ご愛読いただきありがとうございます。ご意見
ご感想などございましたら、ぜひお寄せください
(次の QR コードからどうぞ)。

発 行: 仙台市障害者就労支援センター

(指定管理者: 社会福祉法人仙台市障害者福祉協会)

住 所: 仙台市泉区泉中央2丁目1-1 仙台市泉区役所東庁舎5階

電 話: 022-772-5517 FAX: 022-772-5519

M a i l: hataraport@sendai-wsc.jp HP: <https://www.sendai-wsc.jp>

